

プラグマティズムの意味理論とは何か

井本, 浩之

<https://doi.org/10.15017/1398504>

出版情報 : 哲学論文集. 26, pp.85-103, 1990-09-30. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

プラグマティズムの意味理論とは何か

井本浩之

はじめに

プラグマティズムの意味理論とは何か

一般にプラグマティズムの守則 (maxim) は、人間における認識の起源が可感的な事物との接触にあるという洞察をもとに、或る認識の意味をそのような接触の場としての実際的行為へと還元する、意味の解明方法として知られている。ここでわれわれが問題にしようとするものは、そのような方法によって解明される意味、即ち、パースが言う「プラグマティックな意味」とは何であるのかである。パースがプラグマティズムの守則を初めて提示するのは、一八七七年の『観念を明晰にする方法 (How to Make Our Ideas Clear)』においてである。そこで彼は、観念の意味についてはなく、信念の意味について語ることから始めている。このことは彼が、近代の哲学者たちと異なり、観念と信念、名辞と命題との間に、はっきりとした区別を設けることができない、と考えていたことを意味するのではなからうか。とすれば、近代の「精神と事物との根源的分離」というパラダイムと、それらの唯一の結合点としての「観念と事物との無媒介的一致」という考えかたによっ

て守られてきた観念や名辞の特権的地位は剥ぎとられ、人間的認識の意味を確定しようとする解釈の逆行の、安心できる終着点をわれわれが持ちえないことになってしまいはしないか。⁽¹⁾ もしそうならば、われわれが、或る認識の有意性を判定できない、言い換えれば、或る認識が真に知識の名に値するものであるかどうかの判定基準を実際に手にすることができないということになり、「観念を明晰にする方法」を問うことなど無益な試みであると言われるかもしれない。

一、可謬主義的認識理論

「人間的認識に安心して解釈の逆行を止めることができるような終着点を求めることができない」というテーゼは、既に一八六八年の一連の認識批判の中で主張されている。そこでパースをして認識批判の論文を書かしたものは、「近代的な認識理論がその根底に直観(intuition)という不当なモデルを置いている」という洞察であった。一八六八年の論文の構成は、第一論文「人間に備わっているとされる諸能力に関する問い(Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man)」が直観の不当性を暴くことに、第二論文「四能力の否定の帰結(Some Consequences of Four Incapacities)」が直観をモデルとした認識理論の批判と、それにとって代わられるべき認識理論の提示にあてられている。⁽²⁾ しかしここでそれらを逐次見ていく余裕はないので、まず第一論文の「直観の不当性の証明」を概観した上で、「パースが批判の矛先を向けた近代的な認識理論とは何か」を第二論文で同定し、それからパースが提示しようとする認識理論を解明したいと思う。

第一論文は伝統的にわれわれに備わっているとされてきた諸能力を、より当然と思われるものから順次批判してゆき、最終的に或る一つの能力、即ち、パースが直観とよぶ能力を否定しようという目的で構成されている。⁽³⁾ ここで言う直観とは、パースによれば、「その同じ対象の以前の認識によって限定されないような認識、それゆえそのような仕方では、意識外の対象によって無媒介的に限定される認識」⁽⁴⁾である。それは、論証の絶対的な始まりとしての認識である。更に、判断では

ないような認識は、判断において一個の結論がその前提によって限定されるように、以前の認識によって限定される必要はない。そのように限定されない認識、「それゆえ、超越的対象によって無媒介的に限定される認識」(ind.)が直観である。つまり、直観とは事物からの因果的な限定だけを受ける無媒介的認識である。このような無媒介的認識は有らねばならないように思われる。というのも、一般に認識の系列には第一の認識が存在しなければならぬと、われわれは考えているからである。しかしパースは、われわれがそのような能力を想定する必要があることを次のように証明する。(1)われわれは内感の能力を持たず、われわれの内的世界についての知識すべては、意識の客観的要素、即ち、外的事実の観察から引き出されたものである。私の現存 (existence) の認識や、夢見る、想像する、考える、信じるといった認識の主観的要素の区別も、例外なく外的事実の観察から推理されたものである。(2)それゆえ、あらゆる思考は意識の客観的要素、即ち、表示された (represented) 対象の意識から構築されているわけであるから、われわれは対象を表示するもの、つまり、記号 (sign) なしに思考することできない。それゆえ、記号の内なる思考だけが有効な思考である。(3)さて、思考が記号であるならば、「すべての思考はそれ自身、何か他のものに向かわなければならず、何か他のものを限定しなければならないということが帰結する。なぜなら、それが記号の本質だからである」(S. 253)。それゆえ、すべての思考は他の思考において解釈されねばならないのであるから、われわれは、それ自身他から限定されることはないが、他を限定するような認識、つまり、直観の対象である意識外のあるものの記号を持つことはできない。そのような概念は矛盾概念である。(4)したがって、意識外の対象によってのみ直接限定されるような無媒介的認識、即ち、直観は有り得ないのである。

次にパースはこの直観批判をもとに、第二論文で、近代哲学の父、デカルトの認識理論の批判を展開している。パースはデカルト主義の四つの論点を次のように批判する。

(A) 哲学は普遍的な懐疑をもって始めなければならない (S. 265)。

デカルトにとって認識の究極的な形態は直観である。直観によって把握される明晰判明知に還元できないような知識は、

知識ならざるものとして廃棄されなければならない。それゆえわれわれは、「一生に一度は意図的にすべてを疑え」という格率にしたがってそのような明晰判明知を手に入れなければならない。しかしパースは、われわれがそのような意図的な懐疑を持つことは不可能であると言う。というのも、「われわれが哲学の研究に立ち入ろうとすると、格率によっては追い出せない、われわれが現実を持っているあらゆる偏見をもって始めなければならない」(ibid.)からである。偏見は偏見として知られないがゆえに偏見なのであって、われわれがそれらまでをも意図的に疑うことは実際には不可能である。それゆえ人は実際には多くの事柄を信じているのであり、「彼が疑うのは疑うための積極的な理由を有しているからである」(ibid.)。パースは、意図的な懐疑説に代えて、われわれが積極的な理由を有する疑念と信念との間を揺れ動いている、という疑念—信念循環説を唱える。

(B) 確実性の究極的なテストが個人の内に見いだされねばならない(ibid.)。

いついかなる時にも絶対に確実な永遠真理として、すべての知識の判定基準となる明晰判明知を得るためには、すべての人が一切のものを疑い得る(普遍的な懐疑が可能である)という条件を満たす必要がある。しかし、われわれが実際に抱く懐疑は個人の状況に左右された積極的な理由をもつ個別的特殊的な懐疑である。したがって、或る観念がいかに明晰であろうとも、明晰であるものは確実であるといった、絶対的な真理の判定基準を持つことはできない。「単一の個人に真理の絶対的な判断をさせることは最も有害である」(ibid.)。では、われわれは知識の基盤をどこに求めるべきなのか。「われわれは個人として合理的に我々が求める究極の哲学に到達することを望めない。したがって、われわれはただそれを哲学者の共同体(communitiy)に求められるだけである」(ibid.)。パースは真理探求の場を、個人の内ではなく、共同体に求める。

(C) 論証の多様性が、しばしば不可疑的な前提に依拠する一筋の推論によって置き換えられた。(ibid.)
デカルトにおいて、知識は明晰判明知へと単線的に還元される限りで、あるいは、それから単線的に演繹される限りで、有効な知識と見なされる。ところが直観を認めないパースは、あらゆる知識は重層的な太綱の構造を持つべきであると言う。

知識は「その輪の最も弱いところよりも強く鎖の形をとるべきではなく、その繊維が十分に数多くそして緊密に結合されているならば、その一本一本は細くても構わない太綱のようであるべきである」(ibid.)。パースは知識が知識たる条件としての、観念と事物との無媒介的対応説をとらない。パースは、われわれの認識の体系全体が、その対象との関係に入るといふ、言わば、全体主義(wholism)の立場をとるのである。したがって、或る単一の認識が自らだけの内にその根拠をもつことはできないのであるから、われわれは確実性を楯にして単線的な知識論的理解に固執すべきではない。

(D)デカルト主義は、説明しないだけでなく、「神がそのようにお造りになったのだ」と言うことが説明として見なされる。とても言うのでなければ、絶対に説明できない多くの事実を有している(ibid.)。

直観知を認めることは、一切の以前の認識によって限定されず、事物だけによって無媒介的に限定された認識を認めることである。ところで、或る認識の説明はその限定を明らかにすることである。したがって、限定をもたない認識を容認することは、説明不可能な認識を容認することなのである。直観知を想定する限りで、人は認識の解釈の遡行に安心のできる終着点を見いだすことができる。それは直観主義的な認識理論が持つ最大の利点である。しかしながら、すべての認識は記号的に媒介されているのであるから、説明可能な認識だけが有効な認識なのである。それゆえ、直観を否定するパースは直観的な認識理論の利点を放棄しなければならない。パースは「疑いえないような認識は存在しない」という「可謬主義的認識理論」を取らざるをえないのである。⁽⁷⁾

ここでパースが批判する直観主義的認識理論と新たに提示された可謬主義的認識理論とをまとめておこう。

〔直観主義的認識理論〕

①意図的懷疑説

②個的な精神の内に永遠真理が求められねばならない。

〔可謬主義的認識理論〕

①疑念—信念循環説

②真理を求める場は共同体である。

③ 知識は単線的な構造を持つ。

④ 説明不可能な認識、即ち、疑いえないような認識が存在する。

③' 知識は重層的な太綱の構造を持つ。

④' すべての認識は説明可能であり、それゆえに疑えないような知識は存在しない。

二、プラグマティズムの意義

ここでパースの意味理論を検討する前に、「観念を明晰にする方法」という主題にどのような意義が有ったのかを振り返っておきたい。直観主義的認識理論を採用するデカルトにおいては、観念を明晰化することは何をおいても、物事の真理を決定する形而上学的な企てであった、と言うことができよう。そこには各人が抱く様々な観念を明晰化することによって、すべての知識の判定基準たる永遠真理を、個的な精神の内に獲得しようという動機がはたらいていたと考えられる。ところが、可謬主義的認識理論を採用するパースにとって、それは真理を決定する企てでもなければ、そこには意図的懐疑によって、永遠真理を獲得しようという動機もはたらいてはいないのである。何がパースをして「観念を明晰にする方法」へと駆り立てたのであろうか。

パースの認識理論においては、個々人の探求は真理を求める探求ではない。そもそも一個人がそのような探求を行うことは原理上不可能である(可謬主義的認識理論②)。では、パースにとって人間的探求の目的とはいったい何であるのか。このことが第一に問われねばならない。

(1) 探求の目的

一八七七年に発表された『信念の定着 (Fixation of Belief)』と題する論文は、この人間的探求の目的と、その目的に沿っ

た唯一妥当な探求の方法を、われわれに明らかにしてくれる。まずパースは信念—信念循環説を分節化することから手をつける。パースはわれわれが論理学的な問題を考察するにあたって、暗黙のうちに前提している諸事実として次の三つを挙げた (5. 369)。

(A) われわれの精神状態には「疑念」と「信念」という異なった状態がある。

(B) 思考の対象が同一のまま、精神状態が「疑念」から「信念」へと移行することが可能。

(C) 「疑念」から「信念」への移行は、あらゆる精神を拘束する或る規則にしたがって行われる。

次にパースは「疑念」と「信念」の相異を分節化する (5. 370-372)。

(a) 「疑念」と「信念」とはそれらを抱いている感覚において異なる。われわれは「疑念」を抱くとき問を発し、「信念」を抱くとき判断を下す。

(b) 行為にあらわれる相異。「信念」は願望に指針を与え、行為を実現させる。信じているという感じは、われわれの内部に或る習慣 (habit) が植え付けられているという徴 (sign) であつて、「そうした習慣はわれわれの行為を決定する」。しかし、「疑念」はこうした結果を生じない。

(c) 「疑念」は落ち着きのない満たされない状態であり、そこから「信念」の状態へと逃れようと努力する状態であるが、「信念」は落ち着いた満ち足りた状態であり、われわれはそこから抜け出そうとしない。

これらの分節化から、単に疑念—信念の循環と言われていたものが、正確には、 $\dots \rightarrow$ 「信念(習慣)」 \rightarrow 「行為」 \rightarrow 「疑念」 \rightarrow 「探求」 \rightarrow 「信念(習慣)」 $\rightarrow \dots$ という形式を有することが明らかにされたわけである。探求 (investigation) とは、「疑念」が刺激となつて「信念」に到達しようとする努力である (5. 374)。それゆえ、探求の動機は意図的懷疑ではなく、「疑念」という刺激である。生きた真正の疑いが探求を推進するのである。「疑念」とともに探求が始まり、「疑念」が無くなるとともに探求は終わる。したがつて、信念もしくは意見 (opinion) の定着 (settlement)こそが探求の唯一の目的な

のである (5. 35)。探求は、真なる意見、真理を求めることではない。それは真と信じる信念、単に信念を確立することにはならないのである。パースは、真なる信念と単なる信念との間の区別は概念的に正しくとも、個々人の実際的な探求というコンテキストにおいては、それらは實際上同一であると考えている。或る意見がいかに明晰に真であると見えたとしても、われわれは余りにも過度な主張をしてはならない。というのも、何度も繰り返すように、彼にとつて、個人の中で遂行される探求は真理の探求ではないからである。つまり、私秘的な関心や個人の実際的な目的といったものは、真理や意味の本性的といかなる有意義な関係も持ちえないのである。

(2) 探求の方法

探求の目的が、信念を定着させることであるならば、それを目的とする探求の方法とは、いかなる方法なのであろうか。その方法を求めるにあたって、パースは探求の営みを限定する二つの条件を挙げる。

(1) 推論の妥当性：「推論の目的は、既知のものを考察することによつて、未知のものを発見することである。したがつて、推論は真なる前提から出発して、真なる結論に到達する限り、善い推論である。つまり、推論の妥当性の問題は、思考に関するものではなく、純粹に事実に関わるものである。」(5. 365)

個人は真理を探求する資格を持たないのであるから、探求における推論の妥当性は、個々の推論者の心の動きに左右されるものであつてはならず、純粹に事実に関わるものであらねばならない。

(II) 推論の指導原理：探求の論理において原理となるもの（あらゆる精神を拘束する或る規則）は、習慣に他ならない (5. 367)。つまり、推論を指導する諸原理は、実際に揺らいでいない信念である。しかし、習慣（信念）であるからには、それらは習慣の変化・発展に即して、変化・修正を蒙らざるをえない。それゆえ、出発点となる命題や原理が後になつて疑われることも十分にありうるわけである（可謬主義的認識理論④）。われわれは、探求の論理をつくる際に、原理的な事柄に関して疑いが偶発することがあるかもしれないと心すべきである。他方、探求の出発点となる命題が変化・修

正を蒙らざるをえないものであるのならば、われわれは信念の定着を、われわれの思考作用の影響を蒙ることのない、同一的なものに拠るのでなければならぬ。なぜなら、われわれは第一原理と思われるような命題が疑われるときに、さえ、それを疑う根拠としての信念を有しているのであるから。

この二つの条件を試金石として、パースは四つの信念定着の方法の吟味をしている。それらは固執 (tenacity)、『權威 (authority)』、『ア・プリオリ、科学 (science)』の四つである。これらの内で、或る選ぴとられた意見に固執する方法と、統制された意見にしたがう權威の方法とは、信念 (習慣) を確立する上で最短距離を行っているようであるが、個人の夢を打ち破るような事実や、他の集団との邂逅という事実に出会ったとき、それらは二つの条件を満たすことができない (5. 377-381)。そこで、それらの欠陥を補うために、「有限な共同体という限定を越えた、万人がしたがうべき原理の存在」を、精神そのものの本性の反省から導きだそうとするア・プリオリな方法がとられることになる。しかしこの方法も、結局は事実にはなく、「理性に適合 (agreeable to reason)」方法でしかない。というのも、ア・プリオリ、自然本性的といつても、結局は或る思想家の主観的な好みを脱することはできず、この方法は探求を「趣味の発展 (development of taste)」に似たものにするからである。その点で、この方法は事実に適う方法となりえない。

したがって事実を明らかにするためには、即ち、探求がその出発点から疑われても継続的に遂行されるためには、探求はあらゆる仕方で恣意性を排除するような基盤に基づかなければならない。

「われわれの疑念を解消するためには、われわれの信念が、人間的なものによってではなく、或る外的な恒久性 (external permanency) によって、即ち、われわれの思考がどんな影響も及ぼさないものによって、限定されるような方法が見いだされねばならない。」 (5. 384)

人間的な思考の内に、疑念を解消するための究極的な不可疑の信念が見いだせないのだとすれば、再びわれわれは意図的な懷疑を持ちださねばならないように思われる。第一原理と思われてきた命題が破綻したとき、われわれはどんな信念を背景として探求を行うのか。しかしこのような考えかたは、可感的な事物の領域と精神の領域とは根元的に分離されているがゆえに、すべての人間的認識にはそれらの結合点として説明のしようがない絶対的な始まりが見いだされねばならない、という直観のドグマから逃れられないのである。パースは、人間的思考において絶対確実と思われるような第一原理に特権的地位を与えるドグマをあつさり捨て去ってしまう。それは事物と精神とが根元的に分離されたものであるという、直観主義が前提する存在論的前提に対する反省によつてなされたと考えられる。パースは、特殊な物自体である「観念的な第一のもの (ideal first)」といえども、それ自体では存在せず、「精神と関わりがないという意味で、自体的に在るいかなる事物も存在しない。精神に相關的なものは疑いなくその関係から離れて存在するけれども」と言う (5.311)。その意味で事物と精神とは連続的であり、事物は本質的に可知的なのである。それゆえ、パースの立場に立つ限り、われわれは必ずしも人間的なものの中に、その存在によつて無媒介的に原因されたような基準をもつ必要性はないということになる。科学の方法は「或る外的な恒久性」によつて、言わば、目的論的に限定されるような方法である。さらに、そのような外的な恒久性は、「すべての人に影響を及ぼしているもの、或は、及ぼすであらうものであらねばならない。そしてこれらの作用が、それを受ける個人の条件に応じて必然的に多様であるとしても、その方法は、すべての人にとつてその究極の結果が同じものとなるような方法であらねばならない」(ibid.)、と言われる。

では、科学の方法の基盤である、「或る外的な恒久性」とは、いかなるものであるのか。パースは科学の方法が基盤とする仮説を次のように定式化している。

「實在の諸事物 (real things) が存在し、それらの性質はそれらについてのわれわれの意見から全く独立している。それ

ら実在物 (Reals) は規則的な法則にしたがって、われわれの感覚に影響を及ぼす。われわれの感覚は、われわれとその対象との関係に応じて様々であるけれども、知覚の法則を用いることによって、われわれは事物が本当はいかにあるのかを、推理によって確かめることができる。そして、どんな人でも、彼が十分な経験を持ち、それについて十分に推理するならば、一つの真なる結論へと導かれるであろう。」(ibid.)

その方法の基盤は、「実在の事物が存在する」という信念である。しかしパースのこの信念をもって、「外的な恒久性」が個別的な事物である、と見なすことはできない。そもそも、そのような立場は疑念・信念の循環を不可能にする。というのもその信念は、もつとも根本的なものと見なされてきたものをも、疑うことを可能にするような、「不可疑的なもの (indubitable)」であらねばならないからである。しかし、そのようなものは本当に疑えないようなものであるのか。また、パースはデカルトのように、説明不可能なものを容認するのであるか。パースによれば、そのような信念は探求によって証明されないとしても、科学の方法と、それを支えるこの信念との調和はいつまでもつづき、實際上その方法にたいする疑念が生じることはない、と言われる (ibid.)。なぜなら、反対に、そのような信念を前提としてのみ、真正の疑いは可能となるからである。一つの信念は行為をうながす。行為においてわれわれは実在の事物に接触し、実在の事物はわれわれの感覚に影響をおよぼす。しかし、感覚を因果的に限定する個別的な事物が、われわれの認識そのものを直接に限定するのではない。それはわれわれの認識のきつかけに過ぎない。そのとき、われわれの認識は実際に揺らいでいない信念 (習慣) によって導かれる。さらにそれらの信念は、われわれの思考作用の影響を蒙ることのない「同一的なもの」、「外的な恒久性」である不可疑的信念へと秩序づけられねばならない。そして、われわれを行為へと導いた信念と、その行為の結果われわれがそこへと立ち返った、不可疑的信念との間に相克が見いだされるとき、われわれは新たな探求のための積極的な理由、即ち、真正の疑念を持つことになるのである。科学の方法では、行為の場面であって、すべての信念が不可疑的信念から説明され、またす

べての信念がそれを確認するような作業が常に行われるのであるから、この場合の不可疑的信念は説明不可能な信念ではありえないのである。したがって、信念の定着は、行為を介することによって、常に事実としての不可疑的信念に基づけられねばならない。なぜなら、信念が、経験から汲み上げられ、行為を介して常に自らの成立根拠へと立ち返ることが可能な信念である限りで、われわれはその信念が、何についての信念なのか、を明晰化することができるからである。⁹⁾

(3) プラグマティズムの意義

可謬主義的認識理論が帰結した「疑念—信念循環説」のさらなる分節化は、以上のような探求の目的と、方法論とをもたらしした。デカルトにおいて、その目的が物事の真理を決定しようとする形而上学的な企てであった探求は、パースにおいては、「行為のための習慣の定着」を目的とする探求に置き換えられたのである。また、両者の探求は共に不可疑的信念を容認するのであるが、デカルトの場合のそれは、説明不可能な永遠真理であり、そこからすべての知識が単線的に演繹されるような第一の真理であるのにたいして、パースのそれは、あらゆる信念の源泉であり終着点でもある、自己還帰的な構造をもった根本的信念としてとらえられているのである。

言い換えれば、デカルトにおいて、そのような永遠真理は、それがひとたび精神のはたらきの中でのみ獲得されたならば再び意図的な懐疑を用いることなしに、ふりかえられないものであり、有限な個人の内隠蔽された個別的な知である。他方、パースにおいて、不可疑的信念は、行為を介した認識と感覚との本質的な結びつきの中で、絶えず自然なかたちでふりかえられるものであり、有限な個人のレベルを超えて、すべての人がそれにすべての知の基盤を置くことができるような、知識全体に関する公共的な知なのである。それゆえ、その不可疑的信念は、観念と実在とが一对一の対応関係を構成していることを表現しているのではない。それは、真理の探求がその意見の決定を共同体の意見の一致に委ねたうえで行われるべきである、という条件を付したうえで、信念の総体と実在の総体とが、行為を介した個々の探求によって、いずれは一致し、そのときひとつの命題によってひとつの事物が表示される、というわれわれの探求を規制している希望¹⁰⁾を表現しているのだ

と考えられる。正にパースが観念を明晰化しようとする意義もここにある。その意義は、或る知的な意見を明晰化することが、即ち真理を打ち立てることである、ということにあるのではなく、あくまでも可謬的な人間の探求が、その最終的な拠り所である不可疑的な信念を背景として、個別的な事物との接触から生じる疑念を定着させることにある。確かに、そこには、信念を事実に適合せたい、という意味での真理探求の動機が働いているかもしれない。しかし、個別的な探求が可謬的である以上、或る信念の明晰化イコール真理探求とはなりえないのである。パースにおいては、信念の明晰化と真理探求との間に、真理探求の場が共同体である、という緩衝体が置かれるのである。パースは、「実在性 (reality) という概念が、特定の限界を持たず、知識のはつきりとした増加を受け入れることができる共同体という概念を本質的に含み」(p. 311)、「すべての研究者が結局は賛成することがあらかじめ定められている意見」が真理であり、「こうした意見が表示する対象」が実在の事物である、と述べている (p. 407)^[11]。これらの言明の背後には、われわれの認識が、観念と事物との根源的な分離ではなく、知るものと知られたものの一致というモデルによって規制されているという洞察がはたらいっている。そのようなモデルとしての実在性という信念は、正に「すべての研究者が結局は賛成することがあらかじめ定められている意見」であり、それゆえに、それは探求の共同体が成立するための根本的な条件ともなっているのである。したがって、あらゆる信念は個の内に隠蔽されるものではなく、正に「どんな人でも、十分な経験をもち、それについて十分に推理するならば、一つの真なる結論へと導かれる」ような、公共的な性質をもつものであらねばならないのである。観念の明晰化は、短絡的に真理探求という意義を持つべきではない。それは、真理、並びに、真理探求の場を概念的に同定したうえで問われる、われわれの在り方になつた方法論としての意義を持つべきなのである。

三、プラグマティズムの意味理論

「プラグマティズムそれ自体は形而上学の学説ではなく、物事の真理を決定する企てではないということ、このことをもう一度言うことで十分である。プラグマティズムは、難しい言葉や抽象的概念の意味を突き止める方法に過ぎない。」(5.4
64)⁽¹²⁾

以上で、パースが観念を明晰化しようとする意図が、真理の確定ではなく、或る信念が共同体で正に共有(communicate)されることが、いかにして可能なのか、を問う試みであったことが明らかに became と思う。では共同体でのコミュニケーションを目的とする観念の明晰化の方法、即ち、或る信念の意味の解明方法とはどのような方法であるのか。それがプラグマティズムの意味の理論である。その方法は、一八七七年に発表された『観念を明晰にする方法』と題する論文の中で、「プラグマティズムの守則」という形で定式化されている。

「われわれの概念の対象が、実際的な影響を有するかもしれない、と考えられるような、どのような諸結果を持つと、われわれは考えているのかを考察せよ。そうすれば、これら諸結果についてのわれわれの概念が、その対象についてのわれわれの概念の全体に外ならない。」(5.402)

信念—懷疑循環説は、信念が行為への習慣であることを帰結した。したがって、或る信念の意味を明晰化するには、その信念がどんな習慣を生じるのかを明晰化すればよいわけである。さらに異なった習慣は異なった行為を帰結する。ところが、

異なつた行為は、それぞれが「実際の影響を有するであろうところの諸結果(可感的な諸結果 *sensible effects*)」を生じるのであるから、或る信念あるいは観念を明晰化しようとすれば、結局のところ、その可感的な諸結果を考察しなければならぬということになる。つまり、プラグマティズムの意味の解明方法は、或る信念を明晰化しようとするなら、その信念を、その信念(習慣)が導く行為という作用に伴う、可感的諸結果という反作用を正当化する信念に還元せよ、と云うのである。この理論の核をなすのは、われわれの行為が引き起こす、實在の事物との接触の結果として生じる可感的諸結果である。それは、われわれの思考と實在物との橋渡しをする、有意味性の基準、並びに、意味の同一性の基準としてはたらいている。或る信念が可感的諸結果を持つならば、意味があり、持たないならば、その信念は無意味である。また、二つの信念が同一の可感的諸結果を持つならば、それらの信念は同一の意味を持ち、可感的諸結果が異なれば、それらの信念は異なつた意味を持つ。しかし、或る信念の意味がその可感的諸結果そのものである(あるいは、感覚と伴である)と考えることは完全な誤りである。というのも、そのような考えかたは、観念と事物との無媒介的一致という直観主義を蒸し返すだけだからである。

例えば、「ダイヤは硬い」という命題は、プラグマティズムの守則によつて、「ダイヤは多くの他の物でこすられても、それは傷つけられることはないであろう」に読み替えられる。即ち、プラグマティズムの意味の解明方法とは、或る信念あるいは観念を「 $A \rightarrow B$ 」という仕方、条件―帰結文に読み替えることなのである。この場合、「傷つけられることはない」が実際の諸結果(可感的諸結果)であり、その実際の諸結果を満足させる信念「ダイヤは多くの他の物でこすられても、それは傷つけられることはないであろう」が、当の命題の意味だとされる。「ダイヤは硬い」の意味は、ダイヤの硬さ自身との無媒介的一致ではないのである。また、「力は加速度である」と「力は加速度の原因である」という命題を比べた場合、それらの命題の意味はともに、「或る物体は力の干渉なしになすがままにしておかれれば、あらゆる運動が速力と方向とともに変えないで持続するであろう」である。それらの命題はともに、「あらゆる運動が速力と方向とともに変えないで持続する」と

いう共通の実際の諸結果を持つがゆえに、同一の意味を持つのである。それは、われわれが「寒い」と「It is cold」との間に意味の差がないと考えるのと同じである。

こうしてパースは、有意味性の基準と意味の同一性の基準をともにおわされた、実際の諸結果に基づいて解明された意味を「プラグマティックな意味 pragmatic meaning」と呼ぶ。それは、有限な個人の精神の内て確立された、真理と同一視されるような意味でもなければ、ましてや、ことばの意味をことば以外のものに、さらには、物そのものに還元しようとする行動主義的、あるいは、メカニズム的な意味でもない。プラグマティズムの意味理論は、行為における反作用としての実際の諸結果を意味のメルクマールとしつつも、そこで問題とされる意味は、すべての人の意見が最終的にそれへと収斂する実在性の概念へと秩序づけられるために解釈された観念、ないしは、信念なのである。¹³

おわりに

われわれは、パースの「意味の明晰化の方法」と、それが拠って立つ認識理論を省みてきた。当初の予想どおり、われわれは思考の「自然な出発点」あるいは「解釈の遡行の安心のできる終着点」を、人間的思考の中に見いだすことはできないことが明らかになった。なるほど、パースが言うように、われわれの個別的な探求は、実在性の概念に基づいた無限な探求の共同体において、共有されることが可能な信念の明晰化に徹する必要がある。その意味で、「われわれの探究は真理の探究である」というおごりを捨てなければならない。しかしながら、ローティが言うように、われわれは同時に、実在や真理についての哲学的探求をも捨て去らなければならないのであろうか。¹⁴もしそうであるなら、「観念の明晰化の方法」を問うことなど無益な試みであると言われても仕方がないであろう。だが、パースにおいて、探求が「実在の事物が存在する」という不可疑的信念に依拠したものであったように、われわれの知の営みは何かしら超越的な不可疑的信念に依拠せざるをえない

のではあるまいか。しかし、ここでその回答となるであろう、パースの形而上学的な探求にこれ以上立ち入ることはできない。

註

(1) 文の種類を区別することに対する批判から、思考の自然な出発点として様々な候補が起られてきたが、それらの試みがいずれも失敗に終わった、という主張については、以下を参照。R・ローティ、「哲学の脱構築」、御茶の水書房1985、P. 20-22。

(2) ここでは、われわれが思考の自然な出発点としての地位をもつ信念をもちえないがゆえに、われわれは単に様々な認識理論の比較検討しか行いえない、即ち、われわれは事実を知ることができないという意味の相対主義で、「とつて変わらるべき認識理論」と言っているのではない。パースは直観主義の批判として、デカルト批判を行うのであるが、或る意味では、彼はデカルトを踏襲している。デカルトが哲学の再構築に着手したとき、彼は懐疑主義を認め、権威を究極の真理の拠所とするスコラ哲学者たちの習慣を廃棄した(6, 319)。そこには一度、不可知論を呼び起こすほどの徹底した懐疑主義の後に、われわれの思考の営みそのものを可能とするような、自然な真理の源泉を見いだそうとする欲求がはたらいていた、と考えられる。パースはそのような欲求までも否定しようと考えているのではない。彼はデカルトの認識理論の難点を指摘し、もう一度デカルト自身がさらされた不可知論へと立ち返ったうえで、われわれの認識そのものを可能にする根拠を捜し求めようとしているのである。

(3) この論文は次の七つの問から構成されている。

(Q1) われわれは、一個の認識を単に見ることによって、いかなる以前の認識にも関わりなく、記号から推理することもなしに、その認識が以前の認識によって限定されたものであるのか、それともその対象に無媒介的に関わるのかを、正しく判断できるか。

(Q2) われわれは直観的な自己意識をもつか。

(Q3) われわれは異なった認識の主観的要素間を区別する直観的能力を有するか。

- (Q 4) われわれは内感の能力をもつか、それともわれわれの内的世界に関するすべての知識は外的事実の観察から導かれたものであるのか。
- (Q 5) われわれは記号なしに思考できるか。
- (Q 6) 或る記号は、もしそれが定義によって絶対に認識できないものの記号であったとしたら、なんらかの意味をもつことができるか。
- (Q 7) 以前の認識によって限定されないようななんらかの認識は存在するか。
- (4) Collected Papers C. S. Peirce, Harvard U. Press, 1934 からの引用は、慣例にしたがって巻数と節番号で示す。例えば、(5. 234) は第5巻の234節を表す。
- (5) cf. Justus Bachler, Charles Peirce's Empiricism, Octagon Books, 1966. p. 6 ff.
- (6) ここで語られている認識の客観的要素、主観的要素とは、それぞれ「認識において」表示された (represented) もの、つまりそれをわれわれが意識するところのもの」と、「それによって以上のものが表示されるようになる自己の活動」である。
- (7) 伊藤邦武「パースのプラグマティズム」勁草書房1985, p. 50 ff. 参照。
- (8) 稲垣良典「パースの習慣論」思想1980, 12. p. 24 参照。
- (9) パースは the real, real things と reality という言葉の使い分けをする。これらの前二者が行為の際にわれわれが接する個別的事物を表し、後者がその結果われわれが立ち返る不可疑的信念を表していると考えられる。
- (10) パースはこの希望のことを、探求者を動かし、活気づけている「快活な希望 (cheerful hope)」と呼んでいる (5. 407)。
- (11) 認識の体系全体が実在との関係に入るとは言っても、認識の対局に実在を置く限り、認識は物そのものではないから、結局はパースの認識理論は不可知論にならざるをえないのではないか、と問われるかもしれない。われわれは、なぜに物そのものをもちだそうとするのか。その理由として、われわれの信念が事実を反映しつくすことができないうこと、人間的思考が常に誤謬の可能性を秘めていることあげられよう。しかし直観主義批判によれば、そもそもわれわれがそのような限定的をもたないような認識をもつことは不可能である。可謬的なわれわれの探求を推進するのは、可知的な実在の信念である。したがって物自体を想定する唯一の理由が以上のことであるならば、このような問題は疑似問題であると言わざるをえない。パースは、共同体の

探求が究極まで押し進められたときに表れる意見と実在との間に実在的な区別はない、あるいは、「一般者が実在的な現存をもたねばならない」という観念実在論（スコラ的実念論 scholastic realism）の立場をとる（5. 312）。

(12) これは、ジェイムズの真理説としてのプラグマティズム理解にたいして、パースが反論を試みた箇所の引用であるが、パースの意図がジェイムズのそれとは異なっていたことはこれまでの議論で明らかであると思う。

(13) われわれは、パースの意味理論の特徴を、特にその背景となる認識理論を中心にしてあきらかにしようとしてきたのであるが、ここでは、プラグマティズムの守則によつて明晰化された意味が、どのようなシステムで実在性というわれわれの知の基盤へと秩序づけられていくのかあきらかではない。実在性という概念にもとづいて成立する共同体が採用する観念や信念は、いかなる解釈の系列をたどつて、実在性の概念へと連なっていくのであろうか。それをあきらかにするためには、そのような観念や信念そのものの性質をあきらかにする必要があると思われる。

(14) ローティ、前掲書、序論参照。

（本学大学院博士課程・哲学）